

みのおのおいたち その21

豊川地区(三)



粟生間谷地区の西北部に当たる通称菩提山には、菩提寺という真言宗の寺院がありました。江戸時代には勝尾寺の末寺でしたが、宝暦四年(一七五四)の堂舎修復の願書によると、本堂

や阿弥陀堂が建っていたようです。ところが住職のいない、無住寺院であったことから明治初年に廃寺となり、旧境内地は



長という貴族の「氏寺」菩提寺であり、それも代々受け継がれた「先祖相伝」の寺院であったことがうかがえます。



や領有に基づく荘園制社会に変わっていったことを物語っています。しかも、粟生村でこのうした変革をもたらし、これを

上 素戔鳴尊神社

下 旧菩提寺境内

今はじつに加になっています。創建の年次は不明ですが、勝尾寺文書の康治元年(一一四二)の「佐伯小犬丸報状」と、久安六年(一一五〇)の「藤原佐長報状」などによると、藤原佐

このように、元來は公領であった粟生村でも平安時代の終わりにころになると、貴族の私的な氏寺が建立されるなど、かつての「王土思想」を否定した新しい

推し進めた藤原佐長という貴族がよりどころにしたのが菩提寺であったことも推測できます。一方、鎌倉時代の粟生村には天王社という神社もありました。文永八年(一二七一)の「平大

いって明治二二年以降は豊川村の「村社」になりました。この素戔鳴尊神社は今も菩提山頂に奥地区の鎮守社として鎮座しています。

この天王社の後身と考えられるのが、旧菩提寺境内の近くにある素戔鳴尊神社でしょう。中世の時代から粟生間谷地区の総社であったという伝統を背景にして、明治に入ると粟生村、次

天王社への奉納相撲はその後も行われており、ほぼ百年後の永和四年(一三七八)の「母せのさたつね売券」にも書かれています。毎年九月九日の祭礼には、奉納相撲を見るため粟生村はもとより、近隣各地から貴賤上下の人々が天王社に参り、大いににぎわったことでしょう。

夫新開田報状」に「天王九月九日すまうの料足ニ米壹斗」と書かれていたのが、この神社のこととて、九月九日の天王社の祭礼に「相撲」を催し、その費用にあてる米一斗は、平大夫という名の村人が開いた田で負担したという内容です。ちなみにこの田地は黒谷というところにあり